観音経和談鈔図会

下

263

丹後国与謝郡中村御
世野山成相寺ハ本尊聖
観音 文武天皇十三年
建立して當國世野山
より此処に移さる開基
真應上人なり又ち
齋遠禅師とも云う
麓ハ天橋立九世度の
文殊堂あり神代九
世ゝ神ゝ出現をなし
九世戸とも名付まして
切戸とて眺望無双の
風景なれば言葉も絶えて

754.7
.H4
6976

是故汝等應當一心供養觀世音菩薩是觀世音菩薩摩訶薩於怖畏急難之中能施無畏是故此娑婆世界皆号之為施無畏者

此文は供養の縁相なりすでにおほく功徳をときたるゆゑに常に憶念しうやまひて今観音を供養せよとすゝめたり○怖畏急難とは此娑婆世界におほく七難三毒とうのおそれ危難とあるをことくのぞきたまひ無畏を施し大士と観音を申すなり

無盡意菩薩白佛言世尊我今當供養觀世音菩薩即解頸衆寶珠瓔珞價直百千兩金而以與之作是言仁者受此法施珍寶瓔珞時觀世音菩薩不肯受之

この文の意は無盡意佛の仰にしたがひ頸にかけたまへる瓔珞をとき其手に捧げ慇懃に観音へまいらせける相なり○價直百千両金とは無盡意等覚の菩薩なれば頸にかけたまふ瓔珞はあたひ無量なるべきに百千両とはいへど百は百界千は千如○諸法の無量無辺なりといへども百界千如とれ此さうなり刹ちからにむへんなることをあらはすなり○仁者とは観音をさすなり

○受此法施のし施ニ二ツあり財施と法施なり又財施ニ三ツあり金銀衣類の財宝を施すを下品の布施なり身を施すを中品いのちを施すハ上品なりまた法施ニ二ツありこれも法の布施といふ在家ニて常まつぎと背ろをもつて出家に戒行堅固にして智者いさみあるを妙法といふ計ツまりハ其法施とハ菩薩すると以て二ツつれ戒法施とハ仏道とりとむるをもつて四つの学法施とハ佛者とまうすともちら皆神明佛陀の内縁ふかき人の思ふに法施とつうつり無盡意の瓔珞と銀青へ施しつるを財施なれども一しき一香無他中者と銀せまで法施になかる理あり○不肯受之とハ観音おそしめすやうハ無盡意ハ佛のあけせをうけくらまふ瓔珞とくま

あるいはまさにかのおとをかくとけの仏らまさるとて瓔珞しうへなり

無盡意復白觀世音菩薩言仁者愍我等故受此瓔珞

此文ハかさねて瓔珞をあひらまふこゝろなり

爾時佛告觀世音菩薩當愍此無盡意菩薩及四衆天龍夜叉乾闥婆阿脩羅迦樓羅緊那羅摩睺羅伽人非人等故受是瓔珞

此文は佛観音に對しておほせらるゝやうハ無盡意の懇志とおもひまさに四衆八部にも此瓔珞をうけさすへしとおもんはかりほとけうけ玉へとおほせらるゝなり是則ち佛の口入なり

即時觀世音菩薩愍諸四衆及於天龍人非人等受其瓔珞分作二分一分奉釋迦牟尼佛一分奉多寶佛塔

此文は観音瓔珞をうけたまひその儘ふたつにわかちさゝけて釈迦と多宝佛とにさゝけ玉ふ
○さて此くぶんの義を抜問く釈してこれによりまづかくのごとくの観音を供養せよとすゝめらるゝ手也

いかなる事ぞといふに一さいの衆生の大慈悲愍集
一躰観世音といふ法佛の慈悲をあつく
うつめく観音一体にうつしく具足しかうまとめ
成佛得脱のくめつ慈悲か肝要なりよりて
一さい衆生観音に帰し成佛得脱せしめんと
ちうりて観音を供養せよとすゝめらるゝ也

無盡意觀世音菩薩有如是自在神力遊於娑婆世界

是は文のごとく観音のおん力を褒玉ひける結となり

尒時無盡意菩薩以偈問曰

此文は偈文にかゝるよりつゞきたり
凡げもん二十六行あるなり

世尊妙相具。我今重問彼。佛子何因縁。名爲觀世音

此文のこゝろは無盡意ぼさつのまへの長行にても釈尊の
因縁をとひたてまつりて偈文にてまたとひたてまつり

具足妙相尊。偈答無盡意。汝聽觀音行。善應諸方所

弘誓深如海。歴劫不思議。侍多千億佛。發大清淨願

我爲汝略說。聞名及見身。心念不空過。能滅諸有苦

具足妙相尊偈答無盡意とは具足妙相の尊とは
釈迦如来のことなり

阿難結集のときなりつゞきに汝聽觀音行より下ハ仏の
ちよくなり○汝聽觀音行とハ行ハつやくしてじやうの
行なり○善應諸方所とハみおんこくどに横十方竪
三世を利益したまふなり○弘誓深如海とハ
弘誓ハ誓願なりちかひをふかき海にたとへたまふ○歴劫不思
議とハかずかぎりなきときを久しくさしてのたまふ○侍多千億佛
とハ別願なり釈尊ハ十八の大願あり此願ある四急
ハ十八日とさだめたまふ文のごとく大清淨のぐわんを
おこしたまふときに思ふ我爲汝略說とときたまふ
なりもとのこゝろ我ハこれかたけ汝とハ無盡意なり
○聞名及見身心念不空過能滅諸有苦とハ
観音をねんじたてまつりあゆひき名号をとなへその
みなの苦をのぞ
すくふのちかひし

假使興害意。推落大火坑。念彼觀音力。火坑變成池

此文ハ悪人の害心の火難のこゝろを頌するなり

或漂流巨海。龍魚諸鬼難。念彼觀音力。波浪不能没

此文ハ悪人のもとめの水難のこゝろを頌すなり。○巨海とハ大海のことなり 没ハ串れおぼるゝ ○魚とハくじらなど鯨等どの事なり

或在須弥峯。為人所推堕。念彼觀音力。如日虚空住

須弥山とハ水際より上へ八万四千由旬の山なり ○如日虚空住のりんと或人ふ墜しても少く落ざる事ハ日輪かまひなし 日のごとく虚空にあるてハ毛頭のとがもいんとよふ ゝ日の虚空に住するごとく文点をよく後ハ ことを利ち少く落升てかまへとを日の虚空に あるがごとくふ安 穏くあらんとし

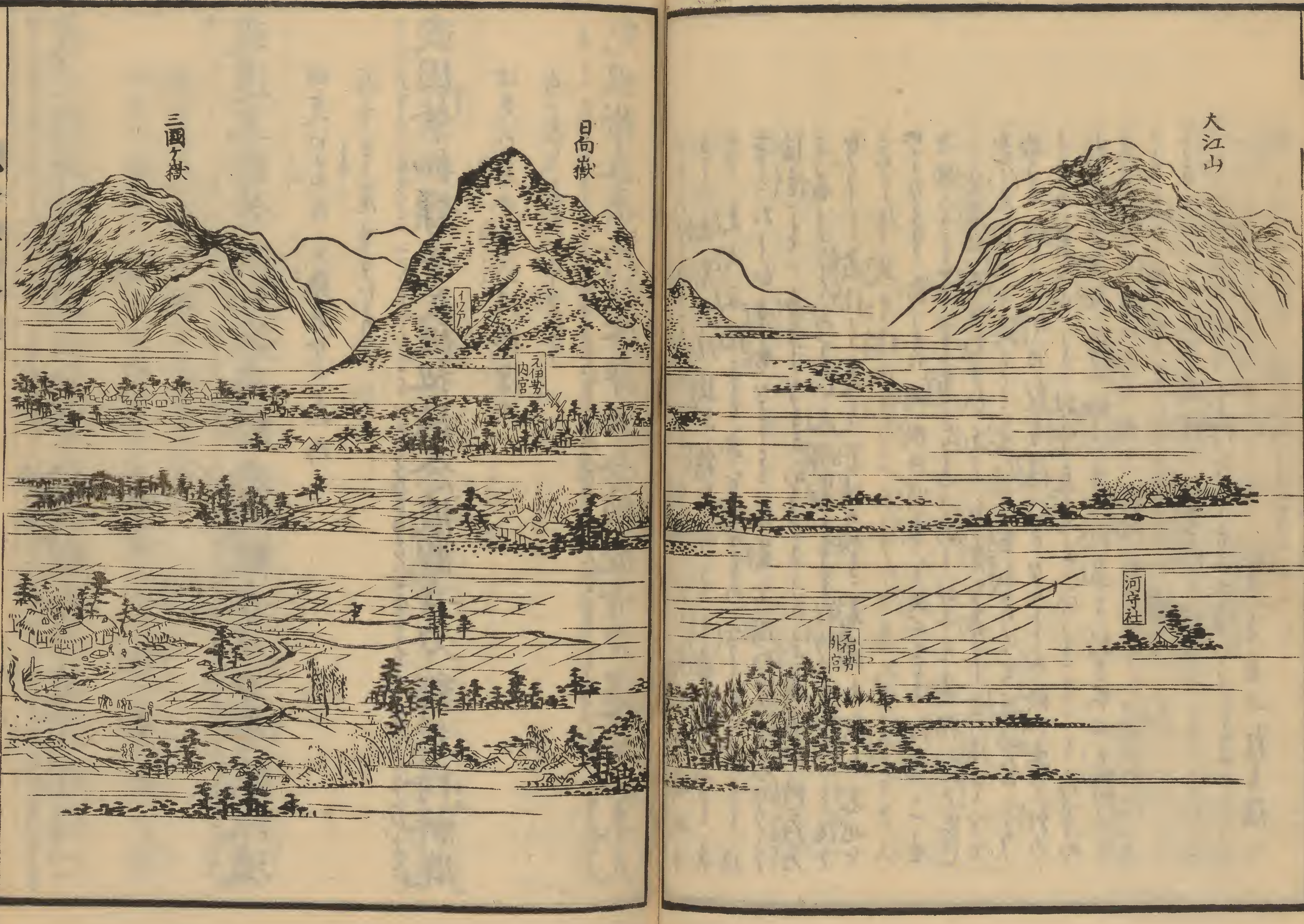
或被悪人逐。堕落金剛山。念彼觀音力。不能損一毛

金剛山とハある說に鉄囲山の峯なりといふなり 此山ハ世界の垣なり 又いふ鉄囲山を須弥山をなけれどとも高山の峯などより おつるとも 観音を念ぜバ少しもけがあるまじきと

昔し丹波の国天田郡菅野村といふ所に毎年十一月七日 一村中あつまり観音の仏像をかけ経をよみ 読経などをとなへ其年もまつり作りしより紙納しと

よろこびわれをわすれて何年おくりしがその年
菊蔵にあたりしがその次の年十一月を以て絵像をおさめ
入あたりしなり志かるに今年の頃三五人よせの筆をとりて
菊家のことを行ふに今年は日輪の為やうやく腰刀
しく行ひしに豊田の夜すへ細工の為研ぎすましける山刀
とりち夜中机へしけるに人もあり手ぬぐひの指を寄附
つくる秋すえを以て後の山中にかくまでの此物音も
の為ども緑つまり悲しく机入せしものを捕へさるべくなる
いへども一向にとゞまりかねきかつひまりと教岩なるぞへ止まずと
当入はしきなれ折から一人の謀り候さう彼者を探しくらへ
せう申すも一命をすてゝも彼を害せんとつゝみにより擬え
なかるべしなさるものを殺しとゞめく我ら筆ときく
さるに思ひしひきし此国は乱人の大石側ありめく勘地の場
ま大木ありつゞきの始末とし年余り明なりずして其て代る
牛をもらひ思ひしてあいがきく人の病性を書きてことを代和し
より大倫出来つる悪をなく互は丹物をすりて付合
まをかうふ其方数千人の病をふけし誘ひあんとも死ヱ志
延なれ陀中ござなん実玉より行ても修羅の巷に沈倫し
ざりひて追ひつ追かまへ山はみけるがりくてんを逃まへ斗米忽ち
伽としまをのりをきて小楯をとりし岩石も斗気ゐる
鉄の熱鬼となりて鉄棒をもりて追めぐるる悪人のそのて

こゝにのがれんとすれどもめぐりは白刃にて身を責むる嶮しきも
まする悪鬼の鉄杖に頭を砕かるゝ苦しさたとへんかたなき身の
なし主人丹後はもとを忘るゝの報にかくのごとし此
悔みたらしむ者ども石塊を探りてそのまゝ悩ませ
後継をば一子年若にしてさうふ未来永劫修羅道
に苦しみひしも人の非道に憂ふりすくしと浪をなし
なりしは義化しなんとも悪魔の為と荒男も忽ち兇を
ることは我等修の為にしかあらずかなかくも人命を生つ
のになるす殺し地獄の呵責を受くるに当一世
を悩ぬ年をも有れまさぬけるを生み恨なき悪し
に是非の義ともせんにつく悲念をおもし但後生とも
私りんは行らし天しくも重く見え恐怖して恨み合ひくり
汝ろふもひらくの年を得る縁るとなりしが彼の悪をも
しその念を出しく村中是を見ゆてひらきうしはまうけぎや
観世音の御種に切りを託し見ては数千万の庇護なる双方
人ておろかさとせ命を前に丹後ありしとさふきなふ双方
ともに両をへりしに観世音の加護にまよりわしてその
ときさ其化しまでひしき縁得も此尊像の化現なりとてける
いつも此尊像を尊仰しけるに此縁もあの年あらし
むと此尊像を村きつゝきて彼方かう方に観音縁を
談しつ又忠大慈を仰ぐくなん


大江山
河守社
元伊勢外宮
日向嶽
三國ヶ嶽
イワヤ
元伊勢内宮

或値怨賊繞。各執刀加害。念彼観音力。咸即起慈心

此文ハぬす人山ぞくにあひまさにころさんとする事数千年あくしんず
返ていつくしミを加ふるこゝろとなり

或遭王難苦。臨刑欲寿終。念彼観音力。刀尋段段壊

此文ハおうの王難のがれられ
んと死ぬるものなり

或囚禁枷鎖。手足被杻械。念彼観音力。釈然得解脱

此文ハおうのちからにて枷鎖の
ちからをもつひすなり

呪咀諸毒薬。所欲害身者。念彼観音力。還著於本人

此文のこゝろハ人をのろひ或ハ毒なぞをもつて殺されんとする
とき観音を念ずれバ却て本人にかへる観音ハ
慈悲深重の菩薩なれバ本人へ着といへども此悪心
をおこさせんためなれバ却て慈悲となるなり

或遇悪羅刹。毒龍諸鬼等。念彼観音力。時悉不敢害

此文ハまへの告りし鬼難の
こゝろを頌するなり

若悪獣圍繞。利牙爪可怖。念彼観音力。疾走無邊方

此文ハ悪獣の難虎狼より河の獣よりあひたりとも観
音を念ぜバ害をなす事もおもひもよらぬ事なり
越中飛驒の國堺にこなたそなた界とて高き山あり麓
に水有村といふ所の人あり飛驒の羽根といふところ
年あつとて十一月十月といふ驚ふりけく彼の山を

跳りかゝる風をきつてしらて身を吹飛され數百丈の谷底に
へまつさかさまに落しがうきやう巖窟の如くへころび落しが
命も慈なりけるがよくいきのびて熊の洞穴まで到り
其の方に大なる熊の爪をとぎて居りけるが又も其
とりつきしかどもたちまちひきはなされけれども
此うちに便なしとて一筋に觀音の御名を唱へければ熊は
さらに害せずして氣色もかはり傍に來り我子をたすけて
さし出しまさなりけれどもさらにゆるさず
熊は其ときに手をさし出し口のかたはらにさしよせて
かのみをなさしめんとよろこびながら熊の手と掌に
耳をさし入れけるにしたがひ
則ちとくへ來て其手に入りたれば
是を掌にのせて
熊はつまさき枝をくゝりてかの
を桃やあはれやおもひあひての熊も
其の傍に來てたてをならべたりけれ
あけ寿觀音の御名を唱へける
覚せられたりしが
已かなまで熊はあつくこれを
来りて
つくしが觀音の御名をとなへて

さらに此われのくるしみに觀世音の名號を唱へ拾ひなさんとて
觀音の御名をたすけてそれよりのち
ちかくに此渡し法花谷の寺にいたり
夜なしに此寺にいたりてもろもろの
さまざまの先年羽根の山中にて熊と
觀世音の御名を唱へて
うき〓〓人間の
がれ一〓
念經を

蚖蛇及蝮蠍　氣毒烟火燃　念彼觀音力　尋聲自迴去

此文ハ毒蛇毒虫の難をのがるゝ說相なり

笑濃ふ木曾路より流れ出る大河あり
川合村といふ處あり此邊は山奥にて
材木多くなれば山より小谷の水を
半なりしが多く出水して村の
なかまあまたもろともに川へ流入引上

良材の流れ來るを見て 所の漁翁の男おもひけるに 其材木の上に僕ひ法版へ引よせんとするに 材木ハ小蛇まとひ吹かくる 深さりくく流れきりハたちめふらくく 打とんとさるく三丈なけとなり 此材木のうく様と見へ しかも忽ち良材變じて大なる蟒となり 頭を廻らしく 一呑にせんとするに 彼男ハ常に打ふ 拾まで大きに呼て けるへ南無觀世音の四句を緩くとなふ 此頭を縮めて姿をうせにけり 柳のごとくなる流れを ひろひくそのちれ材木を拾ひつるにと止まりしとなり

雲雷鼓掣電。降雹澍大雨。念彼觀音力。應時得消散

此文ハ雷の雅なり 延喜の帝ハ禁中に雷さかへ しきり折しも此文をとなへさせ給ひてなり

衆生被困厄。無量苦逼身。觀音妙智力。能救世間苦

此文の意ハ内ハ貪恚癡の三毒に攻められ外 ハ男女のまとひ又貧窮しく病いとわづらひ

うる種々のくるしみあるなり○國の字れとかハる しこのきるもまつろをなり 又病のおりさ意あり 此能救世間苦とふ文をつねく救世観音とも号して奉るなり

具足神通力。廣修智方便。十方諸國土。無刹不現身

此文の意ハおのおのの佛より執金剛神まで 三十三身の意を頌するなり○具足神通力とハ 衆生利益のためにハ神通を現じ衆生を法んと おこさせ給ふ○廣修智方便とハ從法發化し

種種諸惡趣。地獄鬼畜生。生老病死苦。以漸悉令滅

此文の意ハおのおのもろもろ以種々をふる諸國土の文の こころを頌するなり○諸惡趣地獄旧者本の

此法は変異なきを畢す○以澍惠令滅とは生死
の苦しみをめぐみ衆生の心をあたゝめ平かにして
火なん水難などのがるゝ事なり是れおこらざるなり
これより無始より此かたの業生なりといふなり

真觀清淨觀。廣大智慧觀。悲觀及慈觀。常願常瞻仰

此文のこゝろは觀音の功徳なり○觀の字は六
字四とを去声といふ詳なり平声のときは
用ゆる此觀のかたちをとく空觀假觀中觀の
三つあり真觀といふが空觀にあたるなり此觀の心
は諸法は無自性にして実体なきものをいふ
いふなり則ち真の觀なり○さて清淨觀といふは
假觀にあたるなり此觀のよくわかるの
いろ/\の功徳なき柳はみどり花は紅
の色なることを畜類の振舞もまたうき法身なり則
是法義ありといへるやまとなりといふなり刹有の義なり
○さて廣大智慧觀といふが中道觀にあたるも有るも
あらずをあらず平等大慧の心なり○悲
觀及慈觀とは大悲の心をもって一切の苦を救ふ
と悲觀といふなり大慈の心にして衆生に楽
を与ふると慈觀といふなり○瞻仰とは下から上を
見たてまつるといふなり

無垢清淨光。慧日破諸闇。能伏災風火。普明照世間

此文のこゝろは化他の功徳なり○無垢清淨光とは
煩悩なきまことをいふ○慧日破諸闇とは煩
悩をやぶるといふ○能伏災風火とは風水火といふべき
言の偈なきゆゑ水の字をはぶく也とあれど

御本社
太子堂
高良社
神馬

弁天
礼堂
疫神堂
放生亭
放生川

ゐ風火ハ三災のうへより劫末のとき火災は初禅まで水災は第二禅まで風災は第三禅まで至るなりかくのごとく三災おこるときも観音よく衆生を利益したまふゆゑに能伏災風火とのたまふなりまた委細は下の文普明照世間の詞にてあきらかなり

むかし多年観音を念じまつりて常に放生のこゝろざしありし人あり夏の比夕立ありて風吹しておびたゞしく出ければそのうちも堂塔の前に谷川のいかにも[illegible]流るゝ所に多くの魚もすみしに多くあめふりて一村の[illegible]うつくしく水まさりて多くの魚ども見えしかば大きにおどろきなりけるまで捕へとりて[illegible]又も同じ多くのとえしてふしぎにおもひて侍りて立出てみれば水の谷川をおし[illegible]常に[illegible]となりけるが田畠の中に[illegible]多くの魚ども[illegible]死となりけるを[illegible]多くの[illegible]と拾ひとりその川水に放生なしけるや○放生をなすにはひとへに[illegible]放生池とぞ称しそこ

梵釈の泉苑の池又は東寺なみ寺などの池雉波それ大寺などの池とも名は石亀の頭須亀の石亀の頭生じそれなどすぐれて[illegible]さんのなりされば放生の[illegible]いまじきある放生せんずれ大かた放しこゝろのもの虫あつまりきたり

悲體戒雷震。慈意妙大雲。澍甘露法雨。滅除煩惱焰

此文の意は観音三業の利益のおもむき。悲体とは身業の利益なり観音は慈悲をもつて体としたまふ○戒雷震とらふは慈悲ごころそのうち外あるときは怨敵のかたちを現じ悪業造る衆生をおどろかさんために戒雷震とは説きたまへり○慈意妙大雲とは意業利益のおもむき慈悲あまねく一切衆生におよぶことはくもひろく世界をおほふごとくなり○澍甘露法雨とは口業の利益なり説法のあめを降らして

衆生の煩悩のやみを消しますなり。これは普門の徳と頌するなり

むかし甲斐国山梨郡福生村といふ所に武士ありけり。ある日家来もなく一騎にて出でけるに、道にまよひて三里ばかり隔たり、その所の名をしらず。やうやう日も暮れかかりける山中に、ある宿をたのみて一夜をあかさんとせしに、其主人ことの外もてなし、酒をすすめける。その夜ふけて主人、目をさまし、盗賊の心を起こして彼の武士を殺し、金銀をうばはんとはかりけれども、武士は常に観音を念じけるゆゑ、眠りの中にも怖れなく、ふしぎに目ざめて、この男と戦ひけるに、忽ち大勢の山賊おこりて、香門を開き、かかれども、かの武士一心に観音を念じければ、盗賊ども忽ち退散しけり。

山賊の手にかからんとせしが、観音の守護によりてのがれけるとぞ。

諍訟経官處。怖畏軍陣中。念彼観音力。衆怨悉退散

○諍訟経官處とは、公事訴訟なとにて、官の前へ出て申しひらくときも、観音を念ずれば利ありとなり。○怖畏軍陣中とは、戦場へ出るときも、観音を念ずればおそろしきこともなく、かたき怨みも悉く退散すると説くなり。

妙音観世音。梵音海潮音。勝彼世間音。是故須常念

此文の心は、此妙音観世音といふより、みなの文は、皆観音の徳をほめたる文なり。○妙音とは、妙音菩薩の事なり。観音の一名なり。

たゝかひなりとも観音はまづこゝろざしをとゞめ給ふ
とくやう妙音といふ。やすらかに観音といふ事妙音
すぐれてのこゝろは観音と梵音といひ倶音と海
潮音となり。中にも梵音と倶彼世間音といふなり
○海潮音は観音を念ずれば その音に応じてや
うく其のうひ利益しるして潮と浪と同時なる衛るさ
念念勿生疑。観世音浄聖。於苦悩死厄。能為作依怙
此文のこゝろは前の経のごとく観音を念ずるときは法華
とのうしと守らく真実の人はいかにも日年なる文
のごとく於苦悩死厄よく苦生の心に依怙とうるべし
なりこゝにつきて観音を念ずる人受宝の業を結縁
すなはちいかに念じてきかば将ずべきことまことに
観音をとくには その受宝業を将ずるうち縁の

法さとのは将ずべくもえんくりまそ縁のわたくし法
それなかなかしく御ぞといへりける尊くなりとめ
の仏きゝへ所縁あつさ故に此名ときく仏のおこゝろ
へ縁の法さなりこの善業縁なけれバべからず
爰に摂津国住吉郡長谷村といふ数千軒ばかりの一村
ありしに住しける六人はかりして同国勝尾寺の鬼神
うく二十三所順礼まかりし年来の心願として
きしとそよろこび名々中に加六といふものしける
こゝろにあしきものありけれど此ぞ功徳をも常になか
しさ事ども心よくへて笑ひせ名々が同国勤しく
とゞきゝのなれど結縁せ給ふなどいひて寄進とおけて
順礼せし六人も参ければいたしてときの与ふるしひ事ありけれど
我もゆかんとて人をえらしこ加六のむざとゐそくら
付てとりに出綿んで白めを順僧たる加六が門に入
菜をとりて先しみやつらそ内へ入菜をとりし
とりに出して一綿の順僧わかれとうなれ
は何の紙うてきしるのありあはれど順僧にわ
菜の様うるとさわしとうけ出して名分になれせ
人もなしいかくみきふ思ひ参へ入まゝに二十二文あり

此ところまで六八ぶくもさ口とひしことを思ひ出りや観世音の御文ましまさざりしやと宗徒くらしくなりしうへ大士妙智をもつての力法をかまへのせ給ふのおほきにひとつもわするゝひとりとていふ一心にいづれもとなし慈悲大悲のめぐみと念ずる此賽法を御文なしさまへたなるべし普門より現れしきふるひに諸なす人とひさけよう懺悔なし今まさにふしぎや衆生のこゝろよりのふひ法いのまゝかりしりや果つかうる今々修心の浄衲菩薩もさらに御文ましますふん新さなる半なりけり

具一切功德。慈眼視衆生。福聚海無量。是故應頂禮。

具一切功徳とハ観音ハ万善万行諸法の功徳をことごとく具足し万徳円満し玉ひてかけたる事なく○慈眼視衆生とハ法眼及種智をもつて観持三昧の内證より無辺の衆生を利益し玉ふ○福聚海無量とハ大海のうみあるなり其中に不増不減のごとくあり法の川をながれぬる大海なれ

ます半なきなし○法然石をいひすゝむ水をふあつて弟子ふ衆山をさゝへども滅となしをもつて観世音の慈悲ハ無辺の衆生をあまねくすくひ給ふ菩薩く利益しきふを大海をたとへるなり○此文をつくりて桓武天皇御誕生の霊瑞とぞ又口伝あり此帝御誕生のとき慈眼視衆生の文字をたゞのみ手ふうかされ福聚海無量の文字を右のみ手ふにぎりて生れさせたまへ諸道ハ今の京平安城ハ此帝のひらきたまひてよりはじまる繁昌なり又傳教大師の比叡をひらき叡山を草創ましまし仏法さかんなる事此帝の観音の慈眼視衆生の利益なり

爾時持地菩薩。即從座起。前白佛言。世尊。若

有衆生聞是觀世音菩薩品自在之業普門示現神通力者當知是人功德不少

此文の意ハ普門品一品をきく功徳をあらはせり
○持地菩薩釈尊の法莚を称歎しまゐらせ
○持地ハ大地をたもつといふ義とあり

ここに昔より伯母捨山とて年七十にをよびぬれば
親を奥山へつれゆき捨ることありしや今ハ其名のこりておはすり
此所縁をふかくおもふ者ありて母を捨てんとて妻の言にまかせて山に
つれゆきけるにそのくれ日すでにその子にいふやう母を
四方の母我年老たるが思ひに奥山へすてらるゝ事を
いかにかなしまさるも別れにつけて世のならひやいづく
の山におき給ふぞ我ゆくゑはなんにかなしくいまははや
父母をわすれてのちの身ならしくるときは帰る
また慚愧し出たる山へゆき老母をつれかへりしとぞ

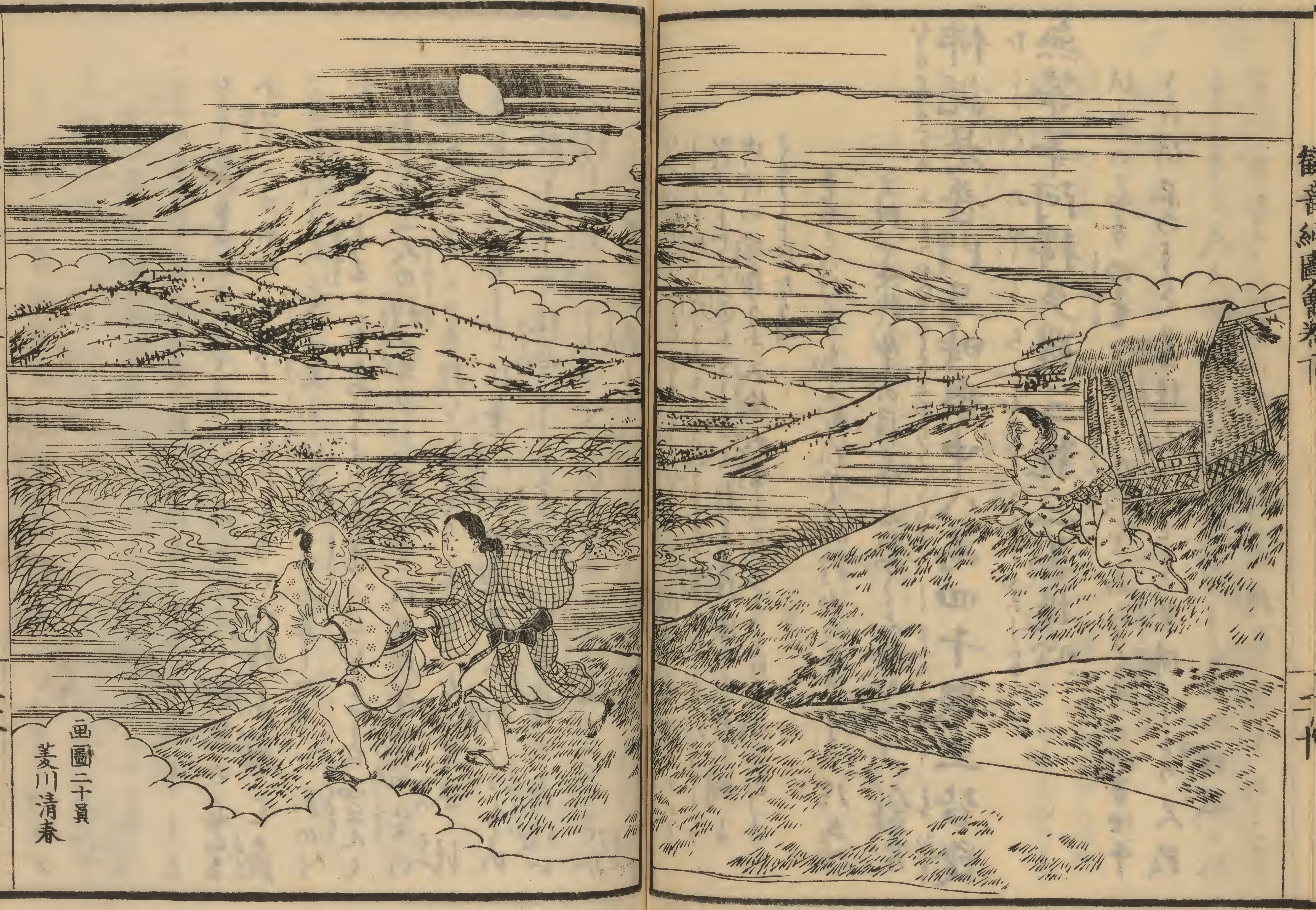
ゆきて親をつれかへりてつかへしと国家は車輪のめぐり
よくしく孫の子もかくれじとさとす宮人かしこくもしらせ
おかどまで道ぶかき釈尊薩埵の功徳を納る
御代の有難さは人倫五常の道あさらかなり今へむかしの
まことなるべし

其やこの山へ出おもひやる姨捨山の桂をそ　楊孝仲

更科や姨捨山の月へひとしおもひやる人は後あらんや　三条右大臣

佛說是普門品時衆中八萬四千衆生皆發無等等阿耨多羅三藐三菩提心

此文の心ハ此普をきく人数をあらはせり○八万四千とハ此品のとき菩提心をおこし求佛したる人数なり又人々のむね乃中にあるところの煩悩が八万四千なり此かんのうが即菩提知恵とあらそ


画圖二十員
菱川清春

ることゝき八万四千の衆生菩提心をおこせしと説たまへ
又曰釈尊一代の説教ハ八万四千の法門なりと云々
八万四千の煩悩を退治せんとの説法なり○衆生
等の身ハなしけれども極地なり四念よ衆等と云
なり衆生へかとけとりもろんをおこし仏果の無等
おなじく四念ふよさまさにとふ人なり○阿耨多羅三藐
三菩提とハ無上正等正覚といふ事なり○あのく
たらとハ無上○三みやくとハ正等○三ぼだいとハ正覚とし
○まさに一人の利益のためにあらず八万四千の衆生の
為なりあまねく菩提をおこさせ志もの〱なしぬ未法
万年にいたるまで此普門品の法益に預りなどの
衆救と志めす仮令まさし宗体余菩薩の教化ハ
末法ハ未滅せしいへども此薩埵の益ありこと
りとものせむと初ありしと焼ざりとものなりけりさいぜ

五百衆生皆法縁念の法益このゑにかぎれるなり大
慈観世音菩薩南無大悲観世音菩薩此
功徳によりて現世安穏後生清浄なることひらき
ものとや

偈のなかとの釈此未の為後乃世にけて実おくるる　実暁

阿耨多羅三藐三菩提の心ち我ら投よ宜なおこせるべし　勝義大師

願以此功徳　普及於一切
我等与衆生　皆共成仏道

六観音

十四日 大悲観音

又ハ千手と申す又千手経にハ不空羂索ともいふ又千光眼ともなづく此ぼさつを称念すれバ破戒の罪をめつして地獄道の苦をまぬかるゝなり

八日 大慈観音

又ハ聖観音と申す此ぼさつを称念すれバ慳貪の罪をめつして餓鬼道のくるしみをまぬかる

十五日 獅子無畏観音

又ハ馬頭と申す此ぼさつを称念すれバ瞋恚の罪をめつして畜生道のくるしみをまぬかる

十九日 大光普照観音

又ハ十一面と申す此ぼさつを称念すれバ散乱の罪をめつして修羅道のくるしみをまぬかる

廿三日 天人丈夫観音

又ハ准胝と申す此ぼさつを称念すれバ懈怠の罪をめつして人道のくるしみをまぬかる

晦日 大梵深遠観音

又ハ如意輪と申す此ぼさつを称念すれバ愚癡の罪をめつして天道のくるしみをまぬかる

此六観音の外に白衣観音 葉衣観音 六字観音 青頸観音 多羅観音等ありといへども略す 但し彼普門品にときたまふ所の観音ハ此ごとく六観音等の異像異号の差別いまだわかざる以前 総体の正観音といふべきものなり

我が平田上水翁常に諸人にすゝめしハ神仏ハ善悪のとがめなきものなれバ出たちに拝めバ拝まずとも神仏ハ心をいためずとおもふべし 善悪の余業によりて衆生をまもりたまふ 神仏の御目より血のなみだをながしたまへども衆生ハ善縁なき故に悟る事なし 一心に神仏を念ずれバ縁とならずといふことなし 利益のなきといふハ利生なきにあらず 一心みだれてまことなき故なり たとへば一つのかがみハ影をうつすといへども心のくもりあるときハうつらず 心をすまして一念の信心をおこすときハ数十町をへだてしひゞきも通ずるごとく神仏の感応をうるときハ利生の益あらざるといふことなし おがまバおがまれ

せりすへかいくるなりよく合点ゆくべしさりとも行ひかたく人気ず
よもんは獣ふうき斜れ行ひはかくし細見しますぐさ
よく我心を吟味なしてわきまへずべし外ハ悲礼をうけ
さまたげず反ふうかぬおもひの却く世身を考ふべし

世の中に麻はあとなくなりにけり
こゝろのまゝに よもぎのみして

世の中にすましなれとも かゝれたり
おのつからまつ なげきたる

よの中にふうきあつまる百徳あれ
うつくしさこそ利益なりけれ

平田止水居士遺稿

源　基定補正

○三十三體観音

龍頭観音
白衣観音
魚籃観音
青頭観音
岩戸観音
葉衣観音
六時観音
一如観音
楊柳観音

持経観音
蓮臥観音
王観音
徳徳観音
能静観音
瑠璃観音
普悲観音
不二観音

圓光観音
瀧見観音
水月観音
延命観音
阿耨観音
多羅尊観音
馬郎婦観音
持蓮観音

遊戯観音
施楽観音
一葉観音
衆宝観音
阿摩提観音
蛤蜊観音
合掌観音
灑水観音

○七観音

千手観音
馬頭観音
十一面観音
如意輪観音
准胝観音
不空羂索
聖観音

○毎月十八日に観音の名号を唱ふれば九千劫がうちの罪を除
きつゝ況や平生忘れず名号をとなへ是仏の観音へ参詣
せしむる人ハ無量億劫の罪障をも滅せずといへり

○又観音へ参詣すべき日

正月朔日	百日にむかふ	二月毎日	百日にむかふ
三月朔日	九十日にむかふ	四月十八日	五十日にむかふ
五月十八日	百日にむかふ	六月十八日	五十日にむかふ
七月十日	四万六千日にむかふ	八月廿四日	四千日にむかふ
九月廿日	六千日にむかふ	十月廿九日	千日にむかふ
十一月七日	六千六百日にむかふ	十二月十九日	四千六百日にむかふ

右の日において是を思へば多くの日かずをむかへてよろづの善
を積ことをいふとぞ、これが参詣することよかりなく悦てうくの
ごく廣大の善根となるゆゑ、別して参詣しかるべき事也

弘簡堂藏板

皇都書林
冨小路通三條
須磨勘兵衛